

# ニワトリの獣医師と呼ばれたくて 20

## ～一所懸命から一生懸命へ～



白田 一敏

### 初めてのお使い??

チャンス到来。

少年時代から夢に描いていたこと、すなわちニワトリの獣医師として、筆者一人で養鶏場を訪問する機会を得た。

「業界で役に立ちたい!!」と意気揚々と業界に飛び込んだ筆者にとつて、今回の農場巡回は臨床経験の質的な第一歩になると予感した。

嬉しい!! 反面、不安……。さまざまに思いが複雑に交差した。

さあ、いよいよ出発だ。

「行ってきます」と張り切って車に乗り込んだ。ふと運転席からラポの玄関を見ると、先輩スタッフたちが少し心配そうな眼差しでこちらを見ていた。福島に来たばかりで道が不案内であった筆者を心配してくださったようだ。

「まるで子供の初めてのお使いみたいだな」

最近テレビをほとんど見なくなったので知らないが、以前は『就学前の子供に近所のお店までお使いをさせる』という主旨の番組が年に何度か放送されていた。番組では親が心

配そうに子供を見つめるといった

シーンが頻繁に放映されていたが、同じような雰囲気を感じたものだ。

さて、単独での初・農場巡回の訪問先はプロイラーの種鶏場であった。筆者の頭の中にあつた巡回の目的は、採血や鶏群の観察ならびに現場に馴染むことの二点だ。のちに理解したことだが、この仕事は製薬会社から依頼された抗菌物質の市販後調査というものであつたら

### 一杯のカッププラーメン

農場に無事到着。

理科系なのに社会科が大好きであつた筆者は、地図を片手に見知らぬ道をドライブすることが結構得意である。最近カーナビゲーションシステムの発達もあり、時として便利な気分を満喫できるが、画面の地図を参考に案内を無視するのが常である。さて、予定より三十分ほど早く着いた。農場主はまだ昼休み中であつた。

「こんにちは。PPQCの白田で

しい。

ちなみに、市販後調査とは抗菌・抗生物質やワクチンなどの製剤を新発売してから一定の期間(五年間)、効能確認や副作用などフィールドで確認する調査のことだ。この調査は法律で実施が義務付けられているものである。

当時、調査の目的や意義などをまったく考えもせずに、指示されるがまま無我夢中で農場巡回をしていたことを振り返ると、まさに「初めてのお使い」と同じであつたと言えるかもしれない。

すが、採血にきました」と休憩所であいさつすると、「やあやあ、☆◆★△?△? (よく来たね、お茶でも飲んで)」と農場主……。

「?..?..?」

なまり(方言)がひどくて何を言われたのか、筆者は正確に理解できなかった。しかし、聞き返すのも失礼な気がした。まず、現場の方と親密になることが信頼関係を作るための鉄則だ。養鶏場で育つた筆者は、農場現場スタッフの気持ちは身を持

って知っている。

「カップメン☆◆★△?△?(食べるかい?)」と農場主の奥さん。

昼食は先ほど済ませたばかりであったが、「ハイ。いただきます」と即座に返答。現場休憩室であったためか? ハエが周囲をブンブン飛んでいた中での食事であったが、気にせずラーメンを全部平らげた。

「☆◆★△?△!(若い子は食べっぷりがいいねえ)」と上機嫌の奥さん。十分に言葉は理解できなかったが、ニコニコと笑顔を返しつつ、その場の雰囲気や相手の様子、あるいは理解できた言葉から相手のストーリーを推測して歓談した。

歓談していると、プロイラー種鶏場の現場の様子がわかってきた。

◎この種鶏場は鶏舎が二棟で、オーリン・オールアウト。

◎プロイラー種鶏会社(本社)と委託契約し、傘下の種鶏場になっている。同じように委託契約した農家があちこちに点在している。

◎委託契約の内容は、管理費、種鶏場の敷地の地代などが中心で、これらの費用が彼らの収入となる。

◎ヒナは本社傘下の育成場から納入される。

◎この種鶏場では鶏種を決定することはない。鶏種の選択は本社で一括して決めている。

◎本社のスタッフが定期的に訪問してくる。

◎飼料は本社で一括購入している。

◎種卵はこの場所でホルマリン薫蒸した後、毎日日本の保管場所まで運ぶシステムとなっている。

◎若メスが導入された直後に、家畜保健衛生所の職員が三人ほどで検査のために来場する。

◎家畜保健衛生所の職員が実施する検査の内容はヒナ白痢とMGが主なもので、その他の詳細について農場主は知らない。

プロイラーに関しては、学生時代に出荷を手伝うアルバイトをした経験があるだけだったので、プロイラー産業はまったくの無知に近かった。歓談の中から、産業構造の一端を垣間見ることができ、大変興味深かったことを記憶している。

方言に少し手を焼いたが、話の概要は理解できたのだろう。どういうわけか、筆者は農場主夫婦に気に入られたようだった。数回にわたって来場しているうちに、農場主の奥さんがポツリと筆者を気に入ってくだ

さつた理由を教えてください。

その理由は、ハエや臭いをまったく気にせず、カップラーメンを平らげたことであつたようだ。

農場には、家畜保健衛生所の獣医師やその他の職員がたびたび来場するが、好意で差し出した食べ物にまったく手をつけない輩が大多数のこと。奥さんの弁では、一般に人々は農場のハエや臭いが気になることは理解できるが、農場が生活環境の一部となつている農場主からすると、こういった態度は一線を引かれた感覚になるのだと寂しそうに話してくださいました。

臨床現場の最前線に立たねばならぬ者にとつて、それが獣医師であることが、医師であろうが、凜告を取る

## 格闘!!

気に入られ過ぎるのも考えもので、話し好きの農場主から「自分の息子の話」やら、「土地を売ってやる」などのプライベートな話題まで話は広がり、いつの間にか農場到着から二時間以上も経過してしまつた。

「やばい。こんな時間になつてしまつた。そろそろ採血を始めなくて

こと(患者から体調、現状、生活環境を聞き取る)が非常に重要であることは論を待たない。獣医師の場合、人間の場合と異なり動物は言葉を発しないというハンディがある。その差を埋めるには、農場主あるいは現場管理者から、いかにできるだけ多くの情報を聞き取れるかがカギとなる。現場から得られる情報を考慮することで正確な診断を下すことができる。したがつて、現場と信頼関係を構築することが、獣医師がフィールドで生き抜く必須条件と言える。偶然ではあつたが、一杯のカップラーメンが現場からのささやかな試験問題となつた。筆者の試験結果は：『第一関門・突破!!』といつたところか。

は!!」

「手伝うかい?」

「大丈夫です。手伝いは要りません。これでも鶏からの採血は大学で一番うまかつたのですよ」と少々胸を張つた。

大学の実習では犬・猫や牛・馬からの採血は何回か実施したが、鶏か

らの採血はほとんどやつていない。所属していた研究室がガンボロ病を研究していた関係で実験用の鶏を飼育していたことや、就職が決まつてからドクターKにご指導をいただいたお陰で採血がうまくなつただけだ。したがつて、実のところは筆者が同期の連中と比べて一番採血がうまいか否かは不明だつたが、時にはハッターリも必要である。

いざ、採血。

勢いよく鶏舎の扉を開いたが、舎内の様子を見て筆者は啞然とした。まず、鶏舎内にケージがない。つまり、平飼い飼育。少し冷静に考えればわかることだが、採卵養鶏業のイメージが強すぎたみたいだ。

農場主が親切に掛けてくださった言葉の本当の意味を、ドアを開けて初めて理解した。彼は採血ではなく、捕鳥を手伝うと言つたのだ。今さらこのことに気づいても後の祭り。格好よく啖呵を切つた責任は自分で取らねばならない。筆者は埃まみれになつて鶏を追い掛けた。

やつこのことで捕まえたら、今度は体重がとにかく重い。体重はメスで三〜四キロ、オスに至つては七

キロ以上になる個体もザラだのと。その上、気が荒く暴れるので保定も簡単ではない。大仕事だ。筆者は体重の軽いメス鶏を捕まえて馬乗りになり、慎重に採血をした。

採血をしていると、背後から異様な殺気を感じた。次の瞬間、背中に衝撃が走つた。筆者の腰の辺りまで背丈のあるオスが飛び掛かつてきたのだ。痛い!!

筆者は重量感のある飛び蹴りをくらつてしまつた。こちらが怯んでいると、再度攻撃を仕掛けてきた。

「なめられてたまるか!!」

筆者は頭に血がのぼつた。急いで立ち上がり威嚇し返した。その姿を見てオス鶏が怯んだ。相手が逃げの姿勢に入つたので鶏舎の隅々まで追い掛け回した。こうすれば、オス鶏は負けを認め、再度襲つてこない。

「勝つた!」。しばし、戦いに勝利した余韻に浸つた。

こうして鶏舎内で悪戦苦闘しているうちに数時間が経過した。ふと我に返ると、わずか五〇本分の採血に夕方まで費やしてしまつたことに気がついた。「急がねば」と再度採血に集中した。

不思議なことなのだが、平飼い飼

育の鶏を採血のために捕まえると何  
度も同じ個体を捕まえてしまう時が  
ある。人間の世界と同じように、鶏  
の世界でも何度も捕まってしまうよ  
うな鈍い奴(鶏)はいるようだ。

やっこの思いで捕まえ、羽根を広  
げた時に先に採血した痕跡を見つけ  
ると、非常にがっかりする。この時  
もそうだった。時間ばかりが刻々と  
過ぎ、焦った。ラボに戻る時間が遅  
くなると、同僚にサボっていたと誤  
解されてしまいそうな脅迫観念があ

## 農場現場は曲者揃い

ブロイラー種鶏場への巡回を皮切  
りに、筆者はP P Q Cのクライアン  
トである採卵養鶏場にも次々と巡回  
し始めた。あらかじめ、ドクターK  
が筆者を各養鶏場のスタッフに紹介  
してくださっていたので、大きな混  
乱はなかった。

しかし、この道十数年といったベテ  
ラン農場長には曲者が多い。「こん  
な若造に何がわかる?」といった姿  
勢を隠そうとしない。農場現場は実  
力社会である。役立たない輩と判明  
すると、あいさつ以外の言葉を交わ  
さない。筆者の父もそうであった。

だったので、気合いを入れて採血を続  
けた。

しばらくして鶏舎から出ると、埃  
まみれになった筆者の姿を見て、農  
場主が笑っていた。

「☆◆★△?△?(随分時間が掛か  
ったね)」

「へへへ…」と苦笑いするしか  
ない筆者であった。こうして初の単独  
農場巡回は大苦戦に終わった。今で  
はホロ苦い思い出だ。

子供の頃、両親が勤めていた養鶏  
場には、ドクターKだけでなく実は  
他の獣医師も診察に来ていた。子供  
ながらに父の態度を観察すると、信  
頼のおけるドクターKと他の獣医師  
に対する態度は天と地ほどの差があ  
った。つまり、信頼できない獣医師  
の指導についてはまったく従おうと  
しなかった。父の態度は決して誉め  
られたことではないが、筆者は『現  
場の恐さ』を十分学ぶことができた。

我々は、現場のコンディションが  
良くなるために、鶏病面を中心に多  
岐にわたるアドバイス(忠告)をして

いる。しかし、そのアドバイスは現  
場スタッフが基本的な飼育管理を  
的確に実施し、指示を忠実に実行し  
て初めて活きる。現場の恐さを知  
っていた筆者としては、農場長の信  
頼を得ることに主眼をおいて現場  
巡回を始めた。

実際に農場を巡回してみると、筆  
者の心配の種は杞憂に近いものだ  
だった。ドクターKが長年にわたっ  
て築き上げた生産現場との絆は非  
常に強いものであったのだ。父が  
ドクターKに全幅の信頼を寄せて  
いたように、他の農場でも同様の信  
頼関係が結ばれていた。

加えて、筆者が少年時代を養鶏場  
で過ごしたこと、青空鶏舎での作業  
の話、あるいはドクターKに憧れて  
獣医師を目指したことなど、さまざ  
まな昔話を現場スタッフに話した  
ところ、彼らは筆者に親近感を抱い  
てくださった。養鶏場で育った経  
験が有利に働いたことを実感した  
瞬間だった。ニワトリの獣医師一  
年生の筆者は、こうして上々のスタ  
ートを切ることができた。

筆者…(株)ピーピーキューシー

品質管理&生産管理部門長  
獣医学博士/獣医師